
唯一無二の最弱モンスター

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯一無二の最弱モンスター

【Nコード】

N0468V

【作者名】

羽月

【あらすじ】

俺の一族はモンスターの中で最弱だ。戦闘とは無縁な秘境でゆつくりのんびり平和に暮らしていたのだが、ある日一族は俺を残して全滅してしまった。他族にとってはたかが3匹、俺達にとってはされど3匹の——スライムによって。只今魔王サマのお膝元に保護してもらって……って、ギャーッス！！スライム来たああああ！！ちょ、その人！！助けてええええッ！！

一話毎に視点がコロコロと変わる予定です。一話完結型。気まぐれ更新。

唯一無二なモンスターです。勿論弱者的な意味で。（前書き）

計画性もなしに新しい話、始めてみました。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

最後に挿絵があるのでイメージ崩壊を恐れる方はご注意下さい。

唯一無二なモンスターです。勿論弱者的な意味で。

昨日、俺の一族は俺一人だけを残して滅んだ。

俺が生き残れたのは川に流されていたところを運良く拾ってもらえたからだ。その恩人は、確か魔王様の側近をしていると言っていた。

—— だから、多分此処は魔王城という所なのだろう。

助けたついでに、と連れてこられたこの建物は、豪華絢爛しつかけらんという言葉がピッタリな所だった。

現在俺の位置するだっ広いこの部屋は、今まで住んでいた家とは180度違う様式だ。下を見れば毒々しいまでの赤い敷物が目を刺激し、左右を見れば何処かしらにキラキラ光る宝石や金が視界に入り、見上げればキラキラ光り輝く何かジャラジャラとしたものがわっさわっさとぶら下がった照明………擬音が多くて申し訳ない。俺が言いたいのは無駄に豪華な照明だって事で。大分前に文献で見た事があるけれど、コレの名称は何だっけ？—— ああ、そうそう、思い出した。確かシャンデリアだ。実物は初めて見たが、落ちてきたら刺さりそうで何とも危険な………じゃなくて。

兎に角、何処を向いても目がチカチカして俺は先程からしきりに瞬きを繰り返している。物凄く目に悪い。もっと緑を増やせば良いのに。緑、良いよ、緑。

そんなくだらない事を考えながら俺は視線を前に戻す。5メートル程先にはこれまた豪華なデカイ椅子がひとつ、存在感を主張する

ようにドドンと鎮座していた。

そして目の前にいるこの子……いや、この方が魔王様なのだろう。
豪華椅子に座ってるし。

俺の視線の先には、ひらひらとした可愛らしい真つ黒な服を身に纏った、どう見ても10歳いくかいかないくらいの女の子が体軀に合わないその豪華椅子にちょこんと浅く座っていた。その小さい身体が益々小さく見え、ついつい加護欲を抱きそうになってしまう……が、この方はやんごとなき魔王様。魔の王であらせられる。恐らく世界で一番強いお方だ。

俺の中の魔王様像は強靱な身体付き、ムキムキマッチョでナイスミドルな美丈夫なので、随分とギャップがある。床に付きそうなその御髪は漆黒のサラサラストレート、瞳は鮮血を思わせる紅色だ。見た目はごく普通の可愛らしい人間の女の子である。強いて変わった所を挙げるとするならば、髪と瞳の色、尖がった耳、あとは彼女を纏う雰囲気^{まど}か。その表情はとも子供のものとは言えない。

大人っぽいというには少し違う感じ……そうだ、達観している。内側から彼女が生きてきた歳月を思わせる何かが滲み出ているのだ。……といっても魔王様の年齢なんて知らないのだけれども。まあ、俺の10倍以上生きている事は確実だ。

俺がそうやって色々思案していると、鈴が鳴る様な可愛い声が鼓膜に響いてきた。

「……ふむ。獣の特徴を持った人型モンスターの様じゃが……色が珍しい………というよりどれとも違う種族か。未確認モンスターがまだいたとはのう……」

興味深げに繁々と眺められる俺の髪は、土台が白で先端にいくほど驚色^{うつくし}に染まっている。瞳は魔王様と同じく紅色。頭と尻からによつきり生えた犬のような耳と尻尾も髪と同じような色合いだ。閉鎖

された空間で生活をしていたので色がどうかは俺には分からない。
……しかしそうか、俺ってレアモノだったのか。毛皮とか高く売れるんじゃない？と考えた所で背筋に冷たいものが走った。……余計な事は考えないでおこう、うん。

魔王様の声は可愛らしいのに何故か従わなければいけないという脅迫概念に駆られる。加えてお年寄りのような喋り方に益々アンバランスだなど失礼な事を思った。……バレたら絞首刑だろうか。この場所に心の読めるモンスターがいない事を切に願う。

続けて「他の者はどうした？」問う魔王様の視線は俺へ向けられていた。これは自分に問われているのだろうか、と俺はチラリと魔王様の傍に控えているガツシリとした身体付きのデカイ金髪兄ちゃんに視線を遣った。彼はどんぶらこと川に流されていた俺を地上へ帰してくれた恩人だ。

魔王様を挟んで反対側にはスラツと背の高い赤髪兄ちゃんが控えているが、この方も側近なのだろう。因みにこの場には魔王様、金髪兄ちゃん、赤髪兄ちゃん、俺の4人しかない。

俺の視線に気が付いた彼は軽く頷いた。……どうやら発言しても良いらしい。

俺は魔王様に視線を戻してゆっくりと口を開いた。

「……助かったのは俺だけです」

「……そうか。……誰に殺^やられた？——人間か？」

魔王様の大きく可愛らしい瞳に剣呑な光が宿る。どうやら人間という生き物がお嫌いなようだ。

此処で俺が「はいそうです」とでも言えば嬉々として自ら襲撃に赴^{おもむ}かれる気がする。だって瞳に凄え好戦的な色を湛えてる。戦いたくて仕方がない、みたいな。

——しかし、俺の答えはノーだ。ご期待に沿えず申し訳ない

が俺達を襲ったのは人間ではない。

俺は俯きながらゆっくり空気を吸って吐き出し、拳を握ってその殺戮者の名を絞り出した。

「……………スライム、に、殺られ、ま、した……………」

「……………今何と？」

……………うつ。

たつぷりと間を空けてから聞き返されてしまった。声が小さ過ぎて聞こえなかったのかも知れない。

こんな情けない告白なんて二度としなくなかったが……………致し方ない。

俺は大きく息を吸い、握った拳へ更に力を入れ、変な汗を垂らしながらもう一度声を絞り出した。勿論俯いたままで。こんな事面と向かって言える訳がない。俺は今、世界で一番自分が弱いと言っているも同然なのだ。情けなさ過ぎて気を失いそう……………失えば良いのに。

「いや、あの……………だから、スライ、ム……………に……………」

どんどん尻つぼみになる俺の声。……………でも言ったぞ？ちゃんと言ったぞ？声は先程よりも大きいから伝わったはずだ。俺はやり切ったのだ。うん、頑張った、超頑張った。

現在、世界で最弱とされるらしいモンスター。その名もスライム青いぶよんぶよんとしたゲル状のアレだ。

以前、比較的弱いと称される人間の子供でも棒で突いて簡単に退治できると聞いた事があるが……………うん、その子達、弱くないよね。頼むから弱いだなんて言わないでくれ。なら俺達どうなっちゃうんだよってなるから。俺達から言わせて貰えば、その子達は間違いな

く猛者に値する。

そんな世界的に最弱扱いをされているスライムより弱い種族――

それが俺達、ノルム族だ。俺達は兎に角戦闘には不向きなのである。俺達の辞書に戦闘という文字はない。あるのは平和と平穩、そして隠居生活最高、だ。

俺達は古の森いにしえと呼ばれる隔離された場所にひっそり住んでいた。そこは敵なんてものは存在しない平和な土地。スライム一匹だっていやしない。俺達はそこで畑を耕したりして自給自足で平和に暮らしていたんだ……昨日までは。突如出現した三体の青い悪魔が襲ってくるまでは。

辺りを静寂が包む。わあ、嫌だ。この空気凄く嫌だ。しかも原因が自分となると居た堪れない事この上ない……理由が理由だし。俺は相変わらずたらたらと嫌な汗を流しながら固まっている。このまま石像になりそう………なれば良いのに。

「……………スライム、とな？」

困惑の色を隠せない魔王様の声が静寂を打ち破った。

俺は魔王様の言葉に静かに頷いた。……もう声を出して肯定するまでの気力は残っていない。精神はぞりぞりと削がれて今では指で摘めるかどうか怪しいところなのだ。

そしてまたもや訪れる静寂。何とも言えない視線が3つ、俺の身体をチクチクと突く。声に出してこそ言われないが、3人の気持ちは綺麗なユニゾンを奏でているに違いない。『弱ッ』『マジで？』『有り得ない』……まあこんなところだろう。

この形容し難い静寂を破ったのは先程と同じく魔王様だった。

「……………お前はどれだけ貧弱なんじゃ」

「……………すみません」

……返す言葉もございません。

残り僅かな精神を駆使し、蚊の鳴くような声でそれだけ言つのが精一杯だった。

俺はこれからどうなるのだろうか。自分で言つのもなんだが、全く以って戦力にはならない。寧ろ足枷にしかならない。強ければ護衛として置いて下さいと頼む事も出来たのだろうか、そんな事俺に言えるはずもなかった。

魔族の恥だとこの場で切り捨てられるのだろうか？……痛いし嫌だなあ。良くてダンボール箱に詰められて捨てられる？……でも最弱な俺はどちらにせよ同じ道を辿る気がする。

あーあ、短い生涯だったなあ、と軽く悟りを開いている俺に、魔王様は溜め息を一つ吐き出して言った。

「……仕方ない、保護する」

「へ？」

その予想外な発言に目を丸くする俺。俺の中の魔王様像は、強靱な身体付き、ムキムキマツチョでナイスミドルな美丈夫に加え、残酷非道で唯我独尊な方なのである。それが実際はこのような慈悲深くて可愛らしいお方だったとは……やべえ、感動して涙が出ちゃう。うぬぬー、と涙を必死で堪える俺に「絶滅危惧種だから当然じゃ」と続ける魔王様。あ、俺そんな扱いなんだ？ いやいや、良いですけども。例え珍獣扱いだとしても安全を保障されるのならば文句は言えまい。魔王様のお膝元となればこれ以上安全な場所はないのだ。ペット扱いでも何でも喜んで受け入れよう。……いや、やっぱペットは勘弁かな。俺にだってプライドというものがある。

「だが少し問題があつてな……」

そう言つて難しい顔をし、何か言い洩る魔王様。何だ？部屋が足りないとか？そんな贅沢は望まないぞ。俺は明日があるだけでも感謝しきれない。

先程までの悲壮感は何処へやら、俺はニコニコ笑つて明るく魔王様に言つた。

「俺なら床でも寝られますよ！本当に助かりました！ありがとうございますっ！！」

「いや……そうでなくてな？」——「あ」

ズルリ、と何かが床を這うような音が聞こえた。同時に跳ね上がる俺の肩と心臓。……何だろう、このトラウマ級な音はごく最近聞いた覚えがあるぞ。

俺は脂汗を掻きながら、徐に視線を下げて発生元である魔王様が座っている豪華椅子の後ろを焦点の合わない目に映した。え、やだ、何このホラー展開。

悪い夢ならさっさと覚めて欲しい。目を覚ましたらいつもの日常に戻るのだ。緑に囲まれたあの楽園へと戻るのだ。そして「こんな夢見ちゃったよー、マジ怖かったー」とか何とか皆に話して思いつきり笑われるのだ。うん、良いじゃない。

……しかし俺のその現実逃避でしかない願いは叶わなかった。

俺の視線の先、豪華椅子の後ろからズルリズルリと音を立てながらゆっくり、それはそれは勿体を付けるかのようにゆっくりと姿を現し、遂に俺の視界に入った……入ってしまった。

俺の目が捕らえたのは晴れた青空のように綺麗な、しかし俺にとつては不吉の象徴でしかない——青。

「——うああああああああああああッ！！！！！」

—— そんなこんなで本日より俺は魔王様のお膝元にて保護さ
れる事になり…… まし、た………。

> i 2 8 2 1 1 — 2 5 3 7 <

唯一無二なモンスターです。 勿論弱者的な意味で。 (後書き)

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです (´・ω・｀)

いやいやいやいや、無理です、死にます。本気です。（前書き）

お久しぶりです。ホント気まぐれで申し訳有りません……
本日もどうぞ宜しくお願い致します。

挿絵はまだ出来ていないので後日……。

いやいやいやいや、無理です、死にます。本気です。

どうも、俺です。

「——ひいつ!？」

青いゲル状の俺です。

「うわああああああ!!」

魔王城といえば最終ダンジョン。最終に相応しくここにいるモンスターは屈強な戦士ばかりだ。

そんな場所にレベル1のか弱い俺がいるのは不思議だろう。

何故此处にいるのか。答えは保護されているからだ。決して戦闘要員ではないぞ。弱すぎて足手まといにもならないからな。踏まれて終わりだ。ぷちつと。

保護されている理由は俺に理性がある珍しいスライムだからだ。他のスライムには理性なんてものはない。本能のみだ。

俺は過去、同族に意思疎通を試みた事が何度もあるが無理だった。「いい天気だな」と話しかけても「エ・サ」、「何処から来た?」と聞いても「エ・サ」、「遊ぼうぜ」と誘っても「エ・サ」……兎に角「エ・サ」としか返ってこない。ム力ついたから2、3体に食紅を振り掛けて紫色にしてやった。数年前、人間達の間で「スライムの新種が!」とか何とか話題になっていたが、犯人は俺だ。いや、食紅だ。

話は変わって、さっきから目の前で勝手に騒いでいるのは昨日こ

の城にやってきた新人。

もやしみたいにひよろつとした得体の知れない人型の未確認モンスター……名前は確かりアだった気がする。

……ってか人の顔見ただけで悲鳴上げるとか失礼なヤツだな。ド突いてやるうか。

「こつち来んなあああああ!!」

毎回思うがコイツは恐ろしく足が遅い。

本当に全力で走っているのか？これじゃ人間の子供より遅いぞ。最弱の名は伊達じゃない。ゲルに負けるくらいだし、なっ！

よし、捕獲。

「うひいっ!!」

廊下を走るんじゃない。危ないな。

……っていつてもコイツは走ってもべらぼうに遅いから危なくはないか……いやいや、心掛けの問題だ。

「ちょ、やめ!!やめたげてええっ!!」

煩いな。こんな所で騒ぐんじゃない。周りに迷惑だ。

口、塞ぐか。

「——ッ!——ッ!」

よし、静かになった。

しかしこの身体から逃れられないとは流石最弱。俺の身体は人間の子供が千切って遊べるくらいに柔らかい。まあゲルだしな。アレ

だ、海中を彷徨ってるクラゲと変わらない扱いだ。無邪気で残虐なその紅葉の手によって桜のように儚く散っていくのだ。切ないな。

——　　と、そろそろ開放してやらなきゃいけないか。俺の身体、青いから顔色が悪いとか分らない。苦しそうだし動きが鈍ってきたからそろそろ限界なのだろう……限界、早いな。流石最弱。おらよ、つと。

「がふっ！ー！ごふっ！ー！ぜえっ……、ぜえっ……、かふっ」

……うん、ギリギリだった様だ。べしやりと潰れたまま起き上がる様子が無いし。

この世界で俺達スライムを下回るヤツが現れるとは思ってもみなかった。あれか？遂に俺の時代がやってきたのか？……照れるなあ。

「や、やめ……」

いやいや、そもそもお前が走るわ騒ぐわするから悪い。言語を發する事が出来ないからこうする他ないんだよ。察しろ。

それなのにこの態度ときた。これじゃまるで俺が悪者だ。なんて濡れ衣。恥を知れ。

そう思いを込めて睨んだが分かってももらえないだろうな。目、無いもん。それどころか前後すら見分けられた試しが無い。一応あるんだけど。

この無礼なもやしはこんなにも愛くるしい俺が恐ろしいのだろう。目の前で震えながら耳と尻尾を垂らしている。その姿は……何とてうか全く以って萌えやしないな。男だしな。これが魔王様ならばさぞかし萌え滾る事だろう。惜しい、実に惜しい……！

「——！？……今邪悪な気配が………ッ！？」

何故バレた。

妙な所に鋭いヤツだな……これが最弱者の防衛本能というものか。
あなどれん。

……まあ、それは兎も角いつまでもここにいたら邪魔だな。廊下のど真ん中だ。いくら幅が広いとはいえ行き交う皆は避けている。
ほら、のろまもやし、あっちへ移動するぞ。

「ぎゃっ！！」

……矢印を作って道を示したただけなのに何故目を瞑るんだ。あれか？刺すと思ったのか？このゲル状の身体でそんなことが出来るとでも？そしてこんな心穏やかな俺がそんな事するとでも？心外だ。そこの鎧兜の剣で串刺しにしてやろうか。

……。
……。

……いつになったら目を開けるんだ。
面倒になってきた。もう連れて行こう。

「うわっ！！ちよっ！！うひっ！！」

……何だこの驚きの軽さは。

みこし神輿気分でわっしょいわっしょいやってたら天井近くまで舞い上がったぞ。

これじゃ神輿じゃなくてバレーのトス練習だな。うん、ちょっと楽しいかも。

うらっ、トス！トス！トス！

「ぶふッ！！」

……やりすぎたか。今すげえ痛そうな音がしたな。すまんかった。許せ。

ゲルで受け止めたが動かない。気絶したか……まあ暴れないし騒がない事は良い事だ。都合が良いからこのままコイツの部屋まで運ぶか。

まったく、世話が焼けるヤツだ。感謝しろ。

いやいやいやいや、無理です、死にます。本気です。 (後書き)

青い悪魔視点。

この後リアは集中治療室へ。

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです。
(、・ω・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0468v/>

唯一無二の最弱モンスター

2011年10月19日23時15分発行